

追い詰められて力を出す

芸能界の重鎮・タモリさんは、「あの時代だったから、東京に来ただけで、今だったら博多にいたままでユーチューバーになっている」と。なるほど、今ではすっかりNHKの番組でも常連ですが、デビューした頃は、本人曰く、「おすぎとピーコと俺は、NHKは出入り禁止だった」との言葉の通り、お世辞にも品があるとは言えない芸風で、それだけに、ユーチューバーになっても受けたんじゃないかなと思います。

「俺もやれたんじゃないかなあ」とも思わなくはないのですが、ただ、その際に大事なものは、プレッシャーを気にしないこと。確かに毎日ヒットさせ続けなければ、すぐに多くの投稿の中に埋没してしまい、顧みられなくなるというのは事実でしょう。

しかし、それでもやはり、途切れることなく、永遠にヒット作を出し続けるというのは、何かしら無理があるんですよ。

焦れば焦るだけ、良い当りは遠のいてしまう。であれば、あまりそこを気にせずに、良い作品が出来たら上げる・・・みたいなスタンスで行くべきなんだろうと思います。もちろん、人によっては逆に追い詰められて力を出すタイプの人もいるでしょうから、これは考え方の違い、タイプの違い・・・ということなのでしょう。

ここで、思い出するのが、先般、亡くなったプロ野球の名監督で、名選手でもあった野村克也翁。翁は、現役時代、稼いだ金はその年のうちに派手に使いまくり、シーズンが始まろうとするときにはきれいに使い切ることで、「今年も稼がないとまずい」という危機感を自分に持たせ、その年の活躍に繋がった。一方、同時期の大投手・村山実翁は、逆に、「その後の生活の保障がないと、ファンに満足してもらえないような思い切ったプレーは出来ない」と思い、現役生活中から不動産経営を始めた・・・と。これは、テスト生として注目されない球団に入った野村と、関西六大学から鳴り物入りで人気球団に入った村山の違い・・・でしょうか。

ただ、ノーベル賞作家・川端康成は気に入った美術品があると、それがどれほど高額であろうが前借りしてでも先に買ってしまい、その金を返済するために、追い込まれてから書き始めるということをやっていたと。川端自身は、幼くして両親に死別し、その後も生き別れだった姉、祖母と次々に失うという薄幸な幼少期を送ったとはいえ、元々、川端家自体は、多少、落剥はしていても、鎌倉幕府執権・北条泰時の末裔を自称するほどの名家。金銭的には、彼の本代が嵩んで食べ物を切り詰めたという程度で、その後も普通に一高、東大へと進学していますから、幼くして父を亡くし、病床の母を抱え、幼い頃から新聞配達やアイスキャンディー売りなどのアルバイトをして家計を支え、高校へ進学するのさえやっとだった野村翁とは違うわけです。(小説家 池田平太郎)

かぐや姫に学ぶ「いい女」の条件

日本最古の物語『竹取物語』をご存知でない方はおられないでしょう。竹から生まれたかぐや姫が成長し、月へ帰るまでのお話です。

かぐや姫はとても美しい女性だったようで、多くの男性から求婚をされています。でも、よく考えてください。『竹取物語』が成立したのは平安時代初期。女性は人前に出ることがなかった時代です。ですから、噂だけで「美しい」とされていた可能性が高いのです。

これだと実物を目にした男性が、現実を言いふらしそうですよ。しかし、『竹取物語』ではそのような描写はありません。それもそのはず。かぐや姫は「いい女」だったのです。「いい女」とは見た目だけでなれるものではありません。かぐや姫がただの美人から「いい女」になれた一つ目の理由、それは「断る」でした。

不思議に思われるかも知れませんが、男性からの誘いを断れるのは「いい女」の条件なのです。誰からの誘いからにもホイホイのっていいは、「いい女」とはいえませんが。断ることで、男性は追いたくなるのです。何としてでも自分のモノにしたいと思う。自分に自信のある男性ほど、女性からの断りの理由を探りたくなるものですね。

ただ断るといっても、かぐや姫は品があります。ストレートに断らず、仏の使った石の鉢や蓬莱山の玉の枝を贈って欲しいと頼みました。この「頼む」も「いい女」の条件です。おねだりですね。このおねだりも毎日ではありません。ここぞという時に行いました。

おねだりというものは、自信のない女性には行えないもの。自分のような者が誰かに頼むだなんてできないと思ってしまふからです。こうなると悲慘な恋愛しかできません。相手の言いなりです。相手と心のキャッチボールができないのですから仕方ありません。おねだりをするというのは、これから恋人になるかも知れない相手と積極的な交流ができるという意味でもあるのです。つまり、断りを入れつつおねだりをする事で相手に期待も抱かせるのです。これはなかなか難しいテクニック。これをかぐや姫はやってのけたのです。だからこそ、遂には時の帝にも求婚をされるようになりました。

今、婚活や恋活をしている女性は、ぜひ「断り」と「おねだり」を意中の男性に試してみてください。この2つで、かぐや姫のように追いかけてくれる女性になれるかも知れませんよ。もちろん、相手への最低限の敬意を忘れずに行ってくださいね。ステキな恋になるよう応援しています。(コラムニスト ふじかわ陽子)

ウイルスの方が先住だ！

新型コロナウイルス感染症絡みのあおり報道に辟易してきたので、ネットで対峙意見の識者を調べると、京都大学の宮沢孝幸准教授がヒットした。You Tubeには藤井聡氏や武田邦彦氏との対談や「そこまで言って委員会」での発言も興味深く聞いた。同じ立ち位置の識者の意見だけでは、情報を正しく理解出来ないことが多いので反対の意見も合わせ見ることが大切だ。

ネットのコメントには宮沢孝幸氏が獣医師であることを理由に、本当の医者でもないのにと、揶揄する人もいた。

医学部よりも獣医学部の方が入学偏差値が低いといいたいのだろうか、レベルの低い批判だ。いろいろ調べてみてわかったことだが、こと、ウイルスに関して言えば、獣医師、生物学者、植物学者などの方がより深く・広く研究している専門家のようなのだ。

昆虫学者のウイルスに関する知見も興味深い。ウイルスを媒介する虫は蝶類が最も多いのだそう。蛾の一種である蚕は今やウイルス研究や薬を作る媒体としても最も貴重な存在で、大活躍しているらしい。皇后陛下が養蚕をしていることからわかるように、蚕は我が国における最も重要な虫だ。

ウイルスはまた、知能があるがごとく動物を操っていると研究も多数ある。たとえば、バキュロウイルスは蛾の幼虫を洗脳して、木のてっぺんに登らせ、そこでじっとしているように操られる。幼虫のほぼ全身にウイルスを増殖させると、さらに他の遺伝子を用いて幼虫の体を溶かす。幼虫の体はウイルス粒子を無数に含んだ液体となってしたり落ち、それより下に生い茂る木の葉に付着する。それを食べた他の幼虫がまたウイルスが感染する。そして、この虫を食べた鳥がウイルスを広範囲に伝染させることで、ウイルスが生きながらえる。

(ペンシルバニア州立大学の昆虫学者ケリ・フォーバー)

日本では根絶した狂犬病(海外ではまだ猛威をふるっている)だが、これもウイルスの仕業で、発症した犬は、目についたあらゆる動物にかみつ、ウイルスを感染拡大させる。狂犬病にかかった犬を操っているのはウイルスだという。まるでゾンビのふるまいとそっくりではないか。

蝶や鳥、今回のコロナ発症源とされているコウモリなど、自由に飛び回れる動物はウイルスにとって最も都合のいい存在(宿主)だ。ウイルスは人間より前に地球に存在していたという。ウイルスの側にたってみれば、地球の主は我々であり、人間は我々の下僕であるということなのかもしれない。ウイルスが今後も生き延び地球で繁栄するためには、せつかく感染させた人間が死んでしまうのがもっとも困るわけで、死なせてしまった場合は、宿主の選択を誤ったことになるのかもしれない。

そういえば、一時期安倍首相関連として騒がれていた愛媛県今治市の加計学園(岡山理科大学獣医学部)はBSEや鳥インフルエンザ対策の一環として設立が認可されたわけだが、今回の新型コロナウイルスを契機に、大幅に予算を積み増して、ウイルス研究のメッカとして、全国のこの分野の専門家を結集させて、世界的な研究機関としたらどうだろうか。

(ジャーナリスト 井上勝彦)

広告